

【優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）】

「宝 物」

栃木県栗野町立清洲中学校 二年 牧野 泰佳

「ジャージャー」と、蛇口から水が勢いよく流れ出る音が聞こえて来ます。私の家は、普通の家庭と比べて水をたくさん使います。なぜならば、私の家では飲食店を営んでいるからです。調理場には、三つ水道があります。だから、蛇口から水が流れ出る音が絶えることなく聞こえるのです。

考えてみると、私は幼い頃から今までずっと毎日、水が流れる音を聞いてきました。私が小さい時、悲しくて母に抱きついた時は、いつも母の体からは食器を洗っているせっけんのおいがしました。私のこれまでの記憶の中には、いつも「水」という存在が刻まれていたのです。今までで、水にさわらなかった日は一日もありません。

先日の夜の事です。夕焼けがとてもきれいでした。私は乳と母が働いているお店のカウンターで、母が忙しそうに食器を洗っているのを見ていました。すると、日頃感じている疑問がつい口にててしまいました。

「ねえ、やっぱりお店をやっていると水道代っていっぱいかかるんでしょ。」

すると、母の隣で豚肉に衣を付けていた父が、言いました。

「そりゃ、他の家よりはいっぱいかかるよ。でも、お店にとっては『命』なんだよ、水は。」私は、父の言葉にちょっとびっくりしました。大げさすぎるように感じたからです。

「水が『命』なんて。ほかのもののほうが大切なんじゃないのかな。」

私はその時、「水なんて身近すぎて、いくらでもあるものだ。どの家にだってあるものなのに、なんで『命』なんだろう。」と信じられない気持ちでした。けれど、私の言葉を聞いた後、母が水を「キュッ」と止めて言いました。

「大げさじゃないわよ。水がなかったらね、食器も洗えないし、料理だって作れない。お店を清潔にすることもできないのよ。

もし水がなかったら、お店を営むことが無理なのよ。大事に使わなくっちゃ。」

「そうかあ。」

思い出してみると、たくさんの水を消費しながらも、母と父が水を無駄に使っている時など一度もないことに気付きました。さっきだって母は私と話す時、水を止めていました。私は、母の言葉を聞き身近にありすぎて水の大切さに気が付いていなかったことが分かりました。私はそんな自分が恥ずかしくなり、少し黙り込んでいると、父が、

「さっき、水道代がいっぱいかかるって言ったよな。でも水のおかげでみんな生活していけるんだ。自然がくれた宝物だから、お礼をしているだけなんだよ。水がくれた命に対して、水道代なんてこれっぽっちも惜しくないんだよ。」

と教えてくれました。そして、

「泰佳も、水を大切につかうんだよ。」

と母が言ったので、私は、

「うん。水は『命』だからね。」

と答えました。

自然がくれた「水」。水がくれた「命」。私はこの日、そのことに気付きました。もし水がなかったら、私達人間はこうして暮らせなかったかもしれません。水は、私達にとって一番身近な存在。そして一番大切な存在なのです。今、私のように身近にありすぎて、水の大切さに気が付いていない人がいっぱいいます。生活が豊かな今、なんでも近くにありすぎて本当に大切なものがわからなくなってしまっているのです。

自然が私達にくれた「水」という最大の宝物。今日もまた大切に使おうと考えています。